



城

第三十三回 世田谷城

～あの人の同族が築いた城なんだ!?!～

山本 忠博

前々回の石神井城いしかんせいの例でもおわかりのように、城跡というものは意外と身近にあるものです。今回も、石神井城と同様に住宅地の中に身近にある例として世田谷城をご紹介します。

今回の主役は「吉良氏」です。あの忠臣蔵の悪役として有名な吉良上野介きらこうずけのすけを後の世に出す源氏の名流です。今回の世田谷城は、この吉良氏の支族が築きました。戦国期の吉良氏の活動には、まったく目立ったものがないので、おのずと世田谷城にも華々しい戦歴はありません。しかし、鎌倉時代から明治時代に到るまでその家名を守った吉良氏の歴史をみるのは、なかなか面白いですよ。

吉良氏とは

吉良氏は足利将軍家と祖を同じくする名族で、巷間では「御所（足利将軍家）が断えれば吉良が継ぎ」とまで言われていました。ちなみに、吉良氏が断えた時はその分家の今川氏が将軍を継ぐと言われました。こちらは今川義元で有名です。

さて、実際には、どう転んでも吉良氏が将軍職を継ぐことはあり得なかったと思いますが、吉良氏が高い家格を誇り、なにかと周囲から特別扱いされていたのは確かです。

吉良氏の起こりと武蔵吉良氏の出世、そして没落

吉良氏が足利氏から分かれたのは、室町幕府初代将軍の足利尊氏から見て四代前の鎌倉時代中期のことです。足利長氏あきながと義継よしつぐの兄弟が三河吉良荘（現愛知西尾市）の地を東西に分けて領したことに始まっており、長氏の流れを宗家として三河吉良氏と呼び、義継の流れを、後に奥州、次いで武蔵むさしに拠点きょてんを移すことから、奥州吉良氏又は武蔵吉良氏と呼びます。後に有名な上野介義央こうずけのすけよしひさを出すのは宗家の三河

吉良氏ですが、今回の世田谷城を築くのは武蔵吉良氏ですので、これから先は武蔵吉良氏について見ていくことにしましょう。（以降、武蔵吉良氏を単に吉良氏と呼びます。）

さて、吉良氏が奥州に拠点を移したのは南北朝時代のことです。1345年に、吉良貞家きらさだいえが奥州管領の一人として足利政権の奥州統治を担うために、奥州国府の多賀城に下向しました。貞家は、南北朝の争乱の時代にあって、北朝勢力（足利政権方）の主要な武将として活動し、奥州における南朝勢力を減退させることに大いに活躍しました。おそらく、この時期が吉良氏の武家としての最盛期です。

しかし、時の足利政権は、内部抗争も起こしており、敵味方が目まぐるしく移り変わっていた時期で、その構図はそのまま奥州の地でも展開されます。つまり、北朝勢力と南朝勢力の戦いだけではなく、北朝勢力の中の複数の奥州管領家同士も相争うこととなり、その中で、吉良氏の勢力は著しく衰退していきます。

吉良氏による世田谷城の築城、そして廃城

奥州での勢力を減退させていた吉良氏は、鎌倉公方（第三十一回石神井城参照）の足利氏により鎌倉に召還されました（1300年代後半）。関東に移った吉良氏は、もともと足利一門であることから「足利御一家衆」という特別な地位を与えられ、関東に領地も得ることができました。そして、少なくとも吉良成高の代までには（1400年代中頃）、世田谷の居館を拡張、整備して城郭を形成したと考えられています。

この成高の時代に起こった戦が長尾景春の乱（1476年、第三十一回参照）で、このとき成高は、太田道灌どうかんに味方して江戸城の守備に当たっています。道灌は書状の中で成高のことを「世田谷殿様」と記していますので、道灌も吉良氏のことは特別扱いしていたようです。

とはいえ、所詮は世田谷辺りの小領主ですから、自身で



世田谷城址公園の土塁

勢力拡大をするだけの力はなく、成高の子の頼康の代に北条氏が関東に進攻してくると、その勢力に抗うことなく姻戚関係によって組み込まれ、本拠を世田谷から^{まいた}蔦田(現横浜市南区)に移すことになり、さらに頼康の次の氏朝の代に豊臣秀吉によって北条氏が攻められると(1590年)、氏朝は目立った行動もせずに所領を失います。この際に、世田谷城は廃城となりました。

江戸時代の吉良氏

吉良氏朝はそのまま何事もなく余生を送ったようですが、その子の頼久は、徳川家康に旗本として取り立てられました。ただし、吉良姓は許されず、北条氏配下の時代の旧領から名を取って「蔦田」と名乗りました。これは、吉良氏の宗家に当たる三河吉良氏が既に徳川の旗本に取り立てられていて、同じ姓を使うことを家康が嫌ったためです。

しかし、宗家の三河吉良氏が、吉良上野介^{よしひさ}義央を赤穂浪士に討たれる事件(1703年)、いわゆる元禄赤穂事件で改易されたため、蔦田氏が吉良氏に復姓しました。蔦田氏から復姓した吉良氏は、その後は何事もなく明治維新を迎えることとなります。

伝説 その1

世田谷城と関係する伝説に、「^{ささぎ}鶯草伝説」があります。時は戦国時代で、吉良頼康の頃の話です。頼康には常磐姫^{ときわひめ}という側室がいました。頼康の寵愛を一身に受けて彼女が身籠もったところ、他の側室達がねたみ、彼女にいわれのない不義の疑いをかけました。そのため、彼女は自害を覚悟し、遺書を白鷺の脚に括り付けて実家に向けて放ちました。それを、たまたま狩に出ていた頼康が射落とす、全てを悟ります。頼康は急いで城に帰りますが、時すでに遅く、

姫は自害した後でした。そして、この白鷺が射落とされた地に鶯草が咲くようになったということです(白鷺を射落とすのをきっかけに、二人が出会ったという別の筋もあります)。鶯草は、今では「世田谷区の花」に制定されています。

伝説 その2

世田谷城の主郭があった豪徳寺は、吉良氏が城内に建立した寺が基になっています。この豪徳寺には、招き猫の伝説があります。それは、彦根藩二代藩主の井伊直孝^{なおたか}が、手招きする猫に誘われて豪徳寺に立ち寄ったところ、豪雨(あるいは落雷)の難を避けることができたというものです。この一件から、豪徳寺は井伊家の菩提寺となり、さらに、後の世には、この招き猫をモデルにした彦根の「ひこにゃん」が生まれるわけです。

世田谷城の現在

世田谷城がどのくらいの広さを誇ったかはわかりませんが、おそらく、現在の豪徳寺の辺りを主郭として、その周囲に広がっていたと考えられます。豪徳寺の横には、城の一画を形成したであろう土塁と空堀が残されており、こちらは「世田谷城址公園」になっています。元々はただの掻きあげの土塁であったはずですが、現在では、土留めのために石垣で補修されています。(間違っても、石垣造りの城と思わないでください。)

豪徳寺の境内には、「招福堂」があり、ここには数多くの招き猫が奉納されています。また、井伊家の菩提寺^{なおすけ}ですから、桜田門外の変で殺害された井伊直弼のお墓もここにあります。さらに、豪徳寺近くの勝光院には、吉良氏一族の墓所がありますので、歴史好きの方は、墓所巡りという、なかなか渋い散策をされてみてはいかがでしょうか。



豪徳寺の招福堂